TADOKU JUNIOR　はじめての名作童話　★★★☆☆ ふつう　738語

# The Three Wishes

## 3つのねがい

Katharine Pyle（1918年の本）　原文そのまま　朗読：alicethefairy

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　木のようせいから「3つのねがいをかなえてあげよう」と言われたなまけ者の男。おかみさんと相談しているうちに、とんでもないことに……。

Once upon a time a poor man took his ax and went out into the forest to cut wood. He was a lazy fellow, so as soon as he was in the forest he began to look about to see which tree would be the easiest to cut down. At last he found one that was hollow inside, as he could tell by knocking upon it with his ax. “It ought not to take long to cut this down,” said he to himself. He raised his ax and struck the tree such a blow that the splinters flew.

At once the bark opened and a little old fairy with a long beard came running out of the tree.

“What do you mean by chopping into my house?” he cried; and his eyes shone like red hot sparks, he was so angry.

“I did not know it was your house,” said the man.

“Well, it is my house, and I’ll thank you to let it alone,” cried the fairy.

“Very well,” said the man. “I’d just as lieve cut down some other tree. I’ll chop down the one over yonder.”

“That is well,” said the fairy. “I see that you are an obliging fellow, after all. I have it in my mind to reward you for sparing my house, so the next three wishes you and your wife make shall come true, whatever they are; and that is your reward.”

Then the fairy went back into the tree again and pulled the bark together behind him.

The man stood looking at the tree and scratching his head. “Now that is a curious thing,” said he. Then he sat down and began to wonder what he should wish for. He thought and he thought, but he could decide on nothing. “I’ll just go home and talk it over with my wife,” said he; so he shouldered his ax, and set off for home. As soon as he came in at the door he began to bawl for his wife, and she came in a hurry, for she did not know what had happened to him.

He told his story and his wife listened. “This is a fine thing to have happen to us,” said she. “Now we must be very careful what we wish for.”

They sat down one on each side of the fire to talk it over. They thought of ever so many things they would like to have—a bag of gold, and a coach and four, and a fine house to live in, and fine clothes to wear, but nothing seemed just the right thing to choose.

They talked so long that they grew hungry. “Well, here we sit,” said the man, “and not a thing cooked for dinner. I wish we had one of those fine black puddings you used to make.”

No sooner had he spoken than there was a great thumping and bumping in the chimney and a great black pudding fell down on the hearth before him.

“What is this?” cried the man staring.

“Oh, you oaf! you stupid!” shrieked his wife. “It’s the pudding you wished for. There’s one of our wishes wasted. I wish the pudding were stuck on the end of your nose! It would serve you right!”

The moment she said this the pudding flew up and stuck to the man’s nose, and there it was and he couldn’t get it off; the man pulled and tugged, and his wife pulled and tugged, but it was all of no use.

“Well, there’s no help for it,” said the husband; “we’ll have to wish it off again.”

His wife begun to cry and bawl. “No, no,” she cried. “We only have one wish left, and we can’t waste it that way. Let’s wish ourselves the richest people in the

world."

But to this the man would not agree. He wanted the pudding off his nose whatever it cost. So at last the wife was obliged to let him have his own way. "I wish the pudding was off my nose again," said the man, and that was the third of their wishes. So all the good they had of the fairy's gift was a black pudding for dinner; but then it was the best black pudding they had ever eaten. "And after all," said the man, "there's nothing much better in the world to wish for than a full stomach."



むかしむかし、まずしい男が、おのを持って森へ木を切りに出かけました。男はなまけ者だったので、森に入るとすぐに、どの木がいちばん切りたおしやすいか、あたりを見回しはじめました。とうとう、中ががらんどうになっている木を見つけました。おので木をたたいてみると、それがわかったのです。「これなら、切りたおすのにそんなに時間はかからないぞ」と男はひとりごとを言いました。男がおのをふり上げて、木にうちこむと、木くずがぱっととびちりました。

すると、たちまち木のかわが開いて、長いあごひげをはやした、小さな年よりのようせいが、木の中からかけ出してきました。

「わしの家を切るとは、どういうつもりだ？」とようせいはさけびました。あまりにおこっていたので、その目はまっ赤な火花のように光っていました。

「あなたの家だとは知らなかったんです」と男は言いました。

「いいか、ここはわしの家だ。かまわないでもらいたいね」とようせいはさけびました。

「わかりました」と男は言いました。「ほかの木を切ったってかまいませんから。むこうの木を切りたおすことにします。」

「それはよろしい」とようせいは言いました。「おまえは、なかなか話のわかるやつだな。わしの家を切らずにおいてくれたお礼に、ほうびをやろうと思う。おまえとおまえのおかみさんがつぎにねがう3つのねがいは、どんなことでもかなうようにしてやろう。それがおまえへのほうびだ。」

それからようせいは木の中にもどり、後ろでかわをぴたりととじました。

男は頭をかきながら、その木を見つめて立っていました。「こいつは、ふしぎなこともあるもんだ」と男は言いました。それから男はすわりこんで、何をねがおうかと考えはじめました。考えて考えましたが、何も決められませんでした。「家に帰って、おかみさんと相談しよう」と男は言いました。そこで、おのをかたにかついで、家にむかいました。戸口から入るとすぐに、男は大声でおかみさんをよびました。おかみさんは、夫に何がおこったのかわからなかったので、いそいでやってきました。

男が話をすると、おかみさんはじっと聞いていました。「なんてすてきなことがおこったんでしょう」とおかみさんは言いました。「さあ、何をねがうか、よくよく気をつけなくちゃね。」

二人は相談しようと、だんろの両がわに一人ずつすわりました。二人はほしいものを、それはそれはたくさん思いうかべました――金貨のふくろ、4頭だての馬車、すてきな家、きれいな服――でも、どれもぴったりのものとは思えませんでした。

あまり長いあいだ話していたので、二人はおなかがすいてきました。「やれやれ、こうしてすわっていても」と男は言いました。「夕ごはんは何もできていないじゃないか。おまえがよく作ってくれた、あのおいしいブラック・プディング（ソーセージ）がひとつあればいいのになあ。」

そう言ったとたん、えんとつの中でドスン、ガタンと大きな音がして、大きなブラック・プディングが、男の目の前のだんろの前に落ちてきました。

「これは何だ？」と男は目をまるくしてさけびました。

「まあ、このまぬけ！おばかさん！」とおかみさんは金切り声をあげました。「あんたがねがったプディングよ。ねがいがひとつ、むだになっちゃったじゃないの。そんなプディング、あんたの鼻の先にくっついてしまえばいいんだわ！いい気味よ！」

おかみさんがそう言ったとたん、プディングがとび上がって男の鼻にくっつきました。くっついたまま、どうしてもとれません。男がひっぱってもひっぱっても、おかみさんがひっぱってもひっぱっても、まったくだめでした。

「しかたがない」と夫は言いました。「ねがって、また取ってもらうしかないな。」

おかみさんは、おいおいなきだしました。「だめ、だめ」とおかみさんはさけびました。「ねがいはあとひとつしかないのよ。そんなことにむだづかいはできないわ。わたしたちを世界一のお金持ちにしてくださいって、ねがいましょうよ。」

けれども、男はそれにはさんせいしませんでした。どんなことになっても、鼻からプディングを取りたかったのです。そこでとうとう、おかみさんは男の好きなようにさせるしかありませんでした。「プディングが、ぼくの鼻からとれますように」と男は言いました。それが、二人の3つ目のねがいでした。こうして、ようせいのおくり物で二人が手に入れたのは、夕ごはんのブラック・プディングひとつだけでした。でも、それはそれまで食べた中で、いちばんおいしいブラック・プディングでした。「それにけっきょく」と男は言いました。「おなかいっぱいになることいじょうに、ねがうことなんて、この世にはそうないものさ。」

## たんご と クイズ 3つのねがい

| | | |
|---|---|---|
| **ax** おの | **forest** 森 | **tree** 木 |
| **fairy** ようせい | **wishes** ねがい | **chimney** えんとつ |
| **nose** 鼻 | | |

**Q1** 男がさいしょにねがったものは？

① 金貨のふくろ　② すてきな家　③ ブラック・プディング

**Q2** プディングはどこにくっついた？

① 男の鼻　② おかみさんの手　③ えんとつ

**Q3** 3つ目のねがいは何に使われた？

① 世界一のお金持ちになる　② 鼻からプディングをとる　③ ようせいにお礼をする

**こたえ**

Q1　③　おなかがすいた男は、つい「ブラック・プディングがあればいいのに」と言ってしまい、ねがいがひとつ使われてしまいました。

Q2　①　おこったおかみさんが「あんたの鼻にくっつけばいい」と言ったので、プディングが男の鼻にくっついてしまいました。

Q3　②　おかみさんはお金持ちになりたかったのですが、男はどうしても鼻からプディングをとりたかったのです。

**原田英語の多読ベストジュニア**

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

**出典**　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：alicethefairy（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。